

# (1) ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究

## 〔1〕ライティングとスピーキングの基礎となる時期の指導 - FORMATION(形成)期の指導と成果 -

### A. Formation期の意義と位置づけ

Formation期は、おもに1年生に対して、リスニング、リーディング、語彙、文法などインプット型のスキルと言語知識の充実に重点をおく。そして、このことを留意して、シラバスの作成と実際の指導を行っている。

しかし、このようなインプット型のスキルは、本校のSELHiでは研究開発の対象としていないので、指導の成果を表現する特別な指標を用意していない。したがって、この点については、後の章において、実用英語技能検定、およびGTEC(ベネッセコーポレーション)を指標として記述したい。

なお、リスニングについては、『スピーキングへと繋がる使用可能な表現の充実』を目的として、英語インプット個人学習ソフト、『ぎゅっとe』リスニングを広島市立大学(青木信之先生、渡辺智恵先生)よりご提供頂いている。このソフト導入の研究上の意義と位置づけは以下の3点がある。

「音声化」の基礎の醸成 「ライティングからスピーキングへの移行・般化」について、知識や思考の『音声化』をスムーズに行うための基礎的なインプットの機会を提供すること

個人差への対応 多量のコンテンツを個人の到達度に応じて、適度なペースで学習できるという利点を指導に生かすこと

効率的な学習環境 授業中の活動として、あるいは課外の活動として、時間的な効率化を図ること。また、将来的には、自宅のコンピュータを使用するなど、場所に縛られない学習環境を提供すること。

本年度(第二学年)では、この『ぎゅっとe』をシラバスに位置づけ、実施科目の担当者ごとに独自の運用を試みた。

表5-1-1-1 FORMATION期の「指導内容」と「パフォーマンスの変化」

FORMATION	1年生	スキル	指標	年間の主効果	年間の変化	第1フェーズ		7月	第2フェーズ		12月			
						4月	有意な変化		イベント型	トレーニング型		有意な変化	イベント型	トレーニング型
FORMATION	1年生	ライティング	総合指数	↑		1.9		(総)英文法演習	2.6	(オ)ジャーナルライティング (行)クラススピーチコンテスト (行)舟入高校スピーチコンテスト	(英)エッセイライティング	2.3		
			流暢さ	速度WPM	**		4.4			5.8			6.7	
				語/文			9.0			8.9			9.6	
			正確さ	語綴率			1.2%			1.5%			0.9%	
				誤文法率			8.3%			9.9%			9.3%	
			適切さ	論拠評価	**		7.4			9.3			7.3	
		スピーキング	総合指数	*		11.6		(オ)1分間モノログ ( )『ぎゅっとe』リスニング400問 ( )音読	13.8	(行)国際交流キャンプ (行)クラススピーチコンテスト (行)舟入高校スピーチコンテスト	(オ)2分間モノログ (オ)即興スピーチ ( )『ぎゅっとe』リスニング800問	17.2		
			流暢さ	速度WPM	**		29.0			35.1			42.7	
				誤発音率			0.4%			0.4%			0.8%	
			正確さ	誤文法率			9.0%			11.3%			9.0%	
				適切さ	論拠評価			6.8			8.0			7.8

## B . Formation期の指導に因るパフォーマンスの変化

Formation期の指導に係わる、パフォーマンスの変化を以下の表5 - 1 - 1 - 2に指摘し、評価する。

表5 - 1 - 1 - 2

Formation期の指導に因るパフォーマンスの変化に基づく結果、考察と評価、および次年度への課題

	結果	考察と評価	次年度への課題
	「総合指数」はライティング、スピーキングとも向上した。	ライティング、スピーキングとも確かに向上はしたが、本年度最終回の結果は、前年度の1年生と比べて、成果が劣っている。学年間の潜在的な力にはとくに大きな差はないと考えられ、この点を考慮して指導内容を改善する必要がある。	指導内容の改善。
	「流暢さ」はライティング、スピーキングとも向上した	モノログやエッセイ・ライティングなどのトレーニング型活動の実践を継続した結果と考えられる。	継続し、慣れさせることを確実に留意する。
	「適切さ」はライティングにおいて、第1フェーズでは向上し、第2フェーズでは下がった。	第2フェーズでは、Productionの活動が増えた。この点を考えると、「量」的な負荷は慣れることで克服できたのかもしれないが、一方で、「質」を高める、すなわち書く内容を吟味することはまた別の部分への負荷となってしまうようである。	「量」と「質」をともに高めることができるのかどうか。
	「正確さ」には有意な変化が見られなかった。	言語知識の充実、すなわち「英文法の演習」などを行うことが直接 production 活動に生かされていない。	Productionにおける「正確さ」の向上をねらって、指導内容を見直す。

表5 - 1 - 1 - 3 個人学習ソフトの使用について

年間の目標値： 最低でも40時間以上、『ぎゅっとe』のリスニングを行う

時期		1学期～夏季休業	2学期～冬季休業	3学期～春季休業
ノルマ		15時間以上	15時間以上	10時間以上
1年	英語 ・ 総合英語	授業中	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる
		課外	5時間以上 放課後の自学自習、夏季休業中の自学自習・補習として使用させる	5時間以上 放課後の自学自習、冬季休業中の自学自習・補習として使用させる
	異文化理解	授業中	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる
		課外	5時間以上 放課後の自学自習、夏季休業中の自学自習・補習として使用させる	5時間以上 放課後の自学自習、冬季休業中の自学自習・補習として使用させる
3年	総合英語	授業中	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる
		課外	5時間以上 放課後の自学自習、夏季休業中の自学自習・補習として使用させる	5時間以上 放課後の自学自習、冬季休業中の自学自習・補習として使用させる
	総合英語	授業中	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる	10時間以上 隔週で、1時間を個人学習ソフトの使用に充てる
		課外	5時間以上 放課後の自学自習、夏季休業中の自学自習・補習として使用させる	5時間以上 放課後の自学自習、冬季休業中の自学自習・補習として使用させる

表5 - 1 - 1 - 4

## 「ぎゅっとe」 リスニングトレーニングの事後アンケート

1 定期的に取り組むことができた				+				+
	1年生	8%	19%	27%	30%	30%	16%	46%
	2年生	16%	23%	39%	39%	10%	13%	23%
	3年生	5%	8%	14%	24%	43%	19%	62%
2 リスニングの内容は簡単である				+				+
	1年生	8%	16%	24%	73%	3%	3%	5%
	2年生	16%	35%	52%	42%	6%	0%	6%
	3年生	14%	38%	51%	38%	11%	0%	11%
3 問題の数は多い				+				+
	1年生	19%	38%	57%	43%	3%	0%	3%
	2年生	29%	29%	58%	32%	6%	3%	10%
	3年生	3%	0%	3%	73%	19%	5%	24%
4 リスニングトレーニングは役に立った				+				+
	1年生	30%	41%	70%	24%	8%	0%	8%
	2年生	23%	32%	55%	35%	3%	6%	10%
	3年生	38%	46%	84%	14%	3%	0%	3%
5 他の教材もやってみたい				+				+
	1年生	35%	32%	68%	24%	8%	3%	11%
	2年生	32%	23%	55%	29%	13%	3%	16%
	3年生	24%	27%	51%	24%	19%	3%	22%

### 平均進捗状況

- ・ 1年生 248
- ・ 2年生 648
- ・ 3年生 432

### そう思う

- ややそう思う
- 普通
- あまりそう思わない
- そう思わない

気づきがあれば書いてください

- ・ 解説があってよかった
- ・ 家でできたらいいと思う
- ・ パソコンを使ってやること、問題の形式がいくつかあるのがおもしろかった
- ・ 解放時間を延長してほしい
- ・ 難しい問題もあったけど、力がついたと思う
- ・ 簡単な問題が多かったのが難しくてよかったと思う
- ・ 写真を見ながらの問題は結構できたけどほかのができないんだと自分で気づけた
- ・ 問題番号があがるにつれて読む人の速度が上がったりしたら楽しかったかな。
- ・ でもとてもためになりました

表5 - 1 - 1 - 5

## SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	川本	住田
------	----	----

第 1 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: オーラルコミュニケーション
--------	----------------	--------------------

## 【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 60 wpm
イベント型	ショウアンドテル、ロールプレイ、スピーチ		

## 【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	29 wpm	36 wpm	43 wpm
トレーニング型	活動内容	毎時間二人組みで最初は1分間、途中から2分間モノログ	第1学期の内容の継続、及びロールプレイ・メイキングストーリー・即興スピーチ・英検トレーニング	即興スピーチ・2分間モノログ・ジャーナルライティング
	工夫点・反省点	テーマの選定に工夫が必要	マンネリ化を避けつつ継続することが何より必要	継続は力なり
イベント型	活動内容	ショウアンドテルとロールプレイを併せたコマーシャル製作	夏休暇課題のエッセイに関するピアリビジョン・発表、及びカナダプロジェクト	カナダプロジェクトの実践(語学研修で利用する冊子の作成とカナダに関するプレゼンテーション)
	工夫点・反省点	日常はおとなしい生徒たちであるが、予想以上に活発で工夫に満ちた発表ができた(一人のせりふは5つ以上という設定)	第2学期のイベントは上記2つの内容で時間的に一杯(毎年の課題とすべきである)	語学研修が近づいてくるとともに生徒のモチベーションも上昇(語学研修を継続する限りこの取り組みは必須)
気づき	なかなか発話ができなかった生徒も次第にできるようになった	流暢さに加えて、内容も伴ったものになるよう指導を継続したい	優れたALTのお陰のこの1年間で、一定の流れはできたか?	

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	栗原	住田
------	----	----

第 1 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 英語
--------	----------------	---------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 120 wpm	暗誦 *** wpm	即興 *** wpm
イベント型			

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	133.4(初見)168(終了時) wpm	134.6(初見)176.4(終了時) wpm	135.2(初見)180.4(終了時) wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	本文の音読(リピーティング・シャドーイング)を行う	本文の音読(リピーティング・シャドーイング・暗誦)を行う 英語学習ソフトを使用したリスニング練習を行う	本文の音読(リピーティング・シャドーイング・暗誦)を行う 英語学習ソフトを使用したリスニング練習を行う
	工夫点・反省点	毎時間音読の時間を確保した(5~10分) ペアワークや個人発表を取り入れて単調にならないようにした 音読への取り組み方の姿勢が、得点に表れるような筆記の小テストを実施した(本文の単語穴埋めをパートごとに実施)	毎時間音読の時間を確保した ペアワークや個人発表を行った 筆記の小テストを実施した 早さだけでなく正確さにも注意して発声させた 英語学習ソフトを活用する時間の確保が困難であった	毎時間音読の時間を確保した ペアワークや個人発表を行った 生徒一人一人に教材テープを配布し、聞き取りにくい箇所・重点的に反復したい箇所を各自が自由に取り組めるようにして、数値・正確さを向上を図った 1,2学期同様に小テストを実施した 英語学習ソフト(全800問)の進捗は平均値が243(最多369、最小156)であった
イベント型	活動内容			
	工夫点・反省点			
気づき		現時点でほとんどの生徒が目標値をクリアしている。 更に数値を伸ばすと共に、早さだけでなく正確さ(強弱・リズム・音の連結、脱落等)にも重点を置く	英 教科書の英文を使用しているため、教材が説明文のみの課を音読する際、生徒は感情移入がしにくいいため、対話分を含む課の場合と比べてやりにくさを感じていた 二週間に1時間の割合で、英語学習ソフトに取り組んだ(定期考査前等の例外あり)	英語学習ソフトについて 使用時に、不具合が生じるコンピュータがあり、取り組みができない生徒がいた 各自の聞き取りの力の差とあわせると、進捗にはかなりの個人差がみられる 取り組み開始が遅れ、終了していない(来年度に継続)

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	栗原	大鴻
------	----	----

第 1 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 総合英語
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 120 wpm	暗誦 80 wpm	即興 *** wpm
イベント型			

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	2学期からの市立大リスニング・プログラムへの取り組みの準備段階として、基礎的な英語力の養成を図った。また、基本例文を正確に暗誦させることで表現力の基礎となる部分を伸ばすようにした。	1学期に引き続き、文法事項を学習し、各項目毎に練習問題を配布して、授業において課題として取り組んだ。また、継続して暗誦に取り組ませた。	従来の教科書やプリントに加え、各单元ごとに映画教材や学習支援ソフトの「ELTAS Pro」を使用し、暗誦や文変換の練習を行った。
	工夫点・反省点	市立大リスニング・プログラムについては、週2時間の授業では文法事項の学習以外には時間が取りにくいので、2学期からは英語の授業を活用する。	文法事項の理解と定着を図るため、問題の質と量を精選したプリントを、各項目毎に用意したが、年間カリキュラムを達成するためのペースとじっくり問題に取り組むペースとが一致しない場合がある。	単なる丸暗記に終わらせずに、ペアで会話文を作らせるなどして学習した文法事項の定着をはかった。 機器の故障や使用説明で時間がかかり、授業進度が遅れ気味になった单元があった。
イベント型	活動内容			
	工夫点・反省点			
気づき	各単元の例文を音読、暗誦させることで表現力の基礎となる部分の文法事項や構文の定着をはかった。その際、速度よりも正確さを重視するようになった。	構文を暗誦する際に、正確に表現できない生徒が多いので、1学期に引き続き、構文や文法事項の定着をはかることに重点を置いた。	機器や映画教材を使った授業は生徒は興味を持って取り組むことができた。文法事項の定着をはかることは概ねできたが、单元によっては文の丸暗記で終わった感否めない。	

〔2〕ライティングとスピーキングの相乗効果による発展のための指導

- CREATION (創造) 期の指導と成果 -

A . Creation期の意義と位置づけ

Creation期は、おもに2年生に対して、エッセイ・ライティング、アカデミック・ライティング、パブリック・スピーチ、プレゼンテーションなど、Formation期の言語知識を土台として、「書く」活動をベースに「話す」活動へと繋げることを目標としている。そして、このことを留意して、シラバスの作成と実際の指導を行っている。

「話す」活動に繋がるための「書く」活動の持つ意義は、概ね以下のようである。

「創造力」と「思考力」の安定化 「書く」活動は、「話す」活動に比べて、time pressureが緩やかである。したがって、宿題などにしてゆっくり書かせる、あるいは課題を与えてその場で考えて5分間で書かせるなど、議論のために必要な「自分の意見を持つこと」に対して、効果的な負荷を提供することができる。

「正確さ」と「適切さ」の醸成 「話す」活動の前段階として、自分の考えを文字化して何度も確認することで、「スペリング」・「文法」・「内容の論理性」などが、自己評価、教師の評価、友人の評価などを通じて修正できる。

「流暢さ」の醸成 「書くように話す」、「話すように書く」など、上記 と の指導にtime pressureを加えることで、相乗効果的な発展が見込まれる。

以上の観点から、「書く」から「話す」へ繋がるトレーニング型およびイベント型の活動をシラバスに位置づけてCreation期の指導を行った。

表5 - 1 - 2 - 1 CREATION期の「指導内容」と「パフォーマンスの変化」

CREATION	2年生	スキル	指標	年間の主効果	年間の変化	第1フェーズ			第2フェーズ			12月	
						4月	7月	12月	4月	7月	12月		
													有意な変化
CREATION	ライティング	総合指数	**		5.2		(表)エッセイライティング		5.7	(表)クリティカルキング	(表)エッセイライティング	6.7	
		流暢さ	速度WPM	*		8.5		(行)ユーロスコラ(ランス)		9.0	(表)アカデミックライティング		9.5
			語/文			10.4				9.8	(表)パブリックスピーチ		10.4
		正確さ	語綴率			1.0%				0.7%	(表)プレゼンテーション		0.8%
			誤文法率	**		8.5%				6.5%			8.6%
		適切さ	論拠評価	**		12.7				12.7			14.8
		スピーキング	総合指数	**		27.4		(表)グループディスカッション (異)発音クリニック	( )音読 (表)即興スピーチ (異)「ぎゅっとe」リスニング400問	27.3	(表)グループディスカッション (異)発音クリニック	( )音読 (表)即興スピーチ (表)2分間モノログ (異)「ぎゅっとe」リスニング400問 (異)音読・暗誦	35.7
			流暢さ	速度WPM		56.0				56.6			59.7
			正確さ	誤発音率		0.4%				0.3%			0.6%
				誤文法率		6.9%				6.9%			6.6%
	適切さ	論拠評価	**		10.1				9.8			12.0	



## B . Creation期の指導に因るパフォーマンスの変化

Creation期の指導に係わる、パフォーマンスの変化を以下の表5 - 1 - 2 - 2に指摘し、評価する。

表5 - 1 - 2 - 2

Creation期の指導に因るパフォーマンスの変化に基づく結果、考察と評価、および次年度への課題

	結果	考察と評価	次年度への課題
	「総合指数」はライティング、スピーキングとも向上した。	ライティング、スピーキングとも確かに向上はしたが、本年度最終回の結果は、前年度の2年生と比べて、成果が劣っている。学年間の潜在的な力にはとくに大きな差はないと考えられ、この点を考慮して指導内容を改善する必要がある。	指導内容の具体的な改善。
	「流暢さ」はライティングのみで向上した	1年次から徹底して、ライティング指導の継続がなされたためと考えられる。 また、最終回の結果は、ライティング、スピーキングとも、前年度の2年生と比べてやや平均値が高く、今後の伸長が期待される。	継続し、慣れさせることを確実に留意する。
	「正確さ」はライティングにおいて、第1フェーズでは下降し、第2フェーズでは向上した。	第1フェーズでは、アジア代表として「ユーロスコラ」(フランス)ヘクラス全員での参加があり、実践的なコミュニケーションを経験した。しかしこのことが必ずしも「文法の正確さ」の向上には必ずしも繋がらなかった。一方、第2フェーズでは、授業中にライティング課題を与え、丁寧にこなすことで、「正確さ」の向上がみられたと考えられる。	実践に役立つ基礎力として、「正確さ」を高める指導を考える。
	「適切さ」はライティング、スピーキングとも向上した。	「創造力」と「思考力」の育成を優先した結果と考えられる。	「創造力」と「思考力」の育成を心がけ、指導を継続する。
	「適切さ」はライティングにおいては、第1フェーズでの向上はみられなかった。	第1フェーズでは、「ユーロスコラ」への参加があり、実践的なコミュニケーションを経験した。しかしこのことが必ずしも「適切さ」の向上には必ずしも繋がらなかった。	実践的コミュニケーションの経験・体験が、「創造力」、「思考力」へと繋がるものとなるよう、留意して指導のプロセスを考える。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭 佐々木 百合子 佐藤 将記

第 2 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 英語
--------	----------------	---------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 130 wpm	暗誦 *** wpm	即興 *** wpm
イベント型			

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	140 wpm	142 wpm	147 wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	本文の 中抜きプリント シャドーイング 暗誦	本文の 中抜きプリント 暗誦 dictation 単語、熟語テスト	本文の 中抜きプリント 暗誦 dictation 単語、熟語テスト
	工夫点・反省点	単語、熟語、文の単位で抜き、日本語のヒントを与えず、前後関係で適切なものを入れさせようと試みた点 詩を感情移入しながら暗誦させた点	に関しては1学期に同じ教科書の文を用いた。	発音、文単位の意味を理解しながら読むことを心がけさせた。特に単語を覚える際の注意事項として発音の大切さ、接頭辞、接尾辞の意味を押さえながら指導した。
イベント型	活動内容		中間研究会における成果の発表『ミニ国際会議ーさまざまな種類の英語』 ・内容の吟味、構築 ・暗誦 ・振り付け	
	工夫点・反省点		顕著な特徴があるものを選んだ。Audienceにより理解してもらうようにskitあり、dialogueあり、音楽あり、コスチュームあり、紙芝居あり・・・と工夫を凝らした。	
気づき	音読のwpmは意図するものが何かを明らかにすることが今後の課題であると思う。	シャドーイングは本文の音読を徹底的にし、ほぼ暗誦に近い状態でないとスムーズにいかないが初見の文章で成功させるべく工夫したい。	正しい発音が自然に出てくるように早い段階で訓練すべきである。 限られた時間内でどれだけの内容を組み込むか？	

表5 - 1 - 2 - 4

SELHi研究特別活動の記録

担当教諭 佐藤将記 近藤あゆみ

第 2 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 英語表現
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 70 wpm
イベント型	グループディスカッション 即興スピーチ ピア・リビジョン(ライティング) PUBLIC SPEECH グループ・プレゼンテーション インフォーマル・ディベート		

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	58 wpm	58 wpm	60 wpm
トレーニング型	活動内容	2分間モノログ(自分自身の経験や意見)	2分間モノログ(自分自身の経験や意見)  Critical Thinking ・Discussion ・How to write a good paragraph	2分間モノログ(社会性のあるトピック)  Practice on Summary
	工夫点・反省点	毎回異なるテーマで変化をつけたが、発話内容に関してペアや教師からのフィードバックがないため、wpmや発話の正確さにおける成果が把握できないことが課題。	一学期の反省を踏まえ、教師がペアに発話内容を尋ねることにより、正確な発話と聞き取りを促した。 essay writingにおいて不可欠なCritical Thinkingの方法を指導した。ディスカッションにも応用できるか課題。	2学期に引き続き、発話内容に関する質問を投げかけ、正確な聞き取りを促した。 ディベートやessay writingを意識し、ディスコース構造の流れを生徒が確認できるようプリントを工夫した。
イベント型	活動内容	ディスカッション(グループ) 即興スピーチ ピア・リビジョン(ライティング) situationを与えて行うstory making	Public Speech ディスカッション(グループ) ピア・リビジョン(ライティング)	インフォーマル・ディベート ピア・リビジョン(ライティング) グループ・プレゼンテーション(1年生がオーディエンス) Term Essayの提出 インタビューテスト
	工夫点・反省点	では賛否両論あるテーマを与え、特にディベートで頻繁に用いる表現を定着させた。 ではグループ内で互いに評価し合い得点をつけたが、英語での発話の正確さを伸ばせきれないことが反省点。	はクラス全員の前で発表させることで生徒の動機を高め、また学校でのスピーチコンテストに繋がった。 では、回数を増やすことでCritical Thinkingやパラグラフ構成の仕方を定着させた。	Procedureを詳しく示したプリントを用意し、それに添って生徒は積極的に参加した。 は事前にトピックに関するリサーチを行い、プレゼンでパワーポイントを使うなど、時間をかけて準備したようだ。
気づき	ピア・リビジョンなど時間をかけて正確に書く力はある。Time pressureの中でいかに正確に話せるか。練習方法を模索する必要があるか。	生徒間に学習意欲の差が出始めている。ピア・リビジョンなどは特にお互いに高めあう姿勢を徹底させたい。	プレゼンを通して、「聴く側に立った分かりやすい英語」をいかに話すかが、次の大きな課題になる。	

表5 - 1 - 2 - 5

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	堂鼻 康晴	栗栖 五代
------	-------	-------

第 2 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 異文化理解
--------	----------------	------------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 90 wpm	即興 *** wpm
イベント型	個人学習ソフト『ぎゅっとe』のリスニングセクション800問完遂		

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	85 wpm	90 wpm	95 wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	・ストレス、リズム、イントネーション、音の連結・同化・脱落に焦点を当て、1分間に85語の速さで正確に再現・発表できるようになるまで音読・復誦・シャドウイング・暗唱活動を行なった。	・個々の音に焦点を当て、1分間に90語の速さで正確に再現・発表できるようになるまで音読・復誦・シャドウイング・暗唱活動を行なった。	・場面と機能を意識しながら正確な英語音声の復誦を目指した1年間の集大成として、米国大統領(J.F.K.)就任演説のレシテーションコンテストを実施した。
	工夫点・反省点	・ストレス、リズム、イントネーション、音の連結・同化・脱落を体感させるため、リズムマシンを活用した。 ・即興性と異文化に対する気づきを促進するため、毎授業時、異文化マンガを導入し、英語による描写と内容に関する討論を行なった。	・個々の音に焦点を当て、場面と機能を意識しながら正確に再現できるように、独創的スキットを制作させ撮影した。 ・より実際的なスキットとなるよう、教室以外の場所で撮影ロケを敢行した。	・より本格的な演説となるように、事前に大統領就任演説のビデオを視聴させた。 ・審査の公平性とコンテストへの参加意識を高めるために、相互評価方法を導入した。
イベント型	活動内容	・週1回、『ぎゅっとe』を活用し、聴解訓練を行なった。	・週1回、『ぎゅっとe』を活用し、聴解訓練を行なった。	・週1回、『ぎゅっとe』を活用し、聴解訓練を行なった。
	工夫点・反省点	・『ぎゅっとe』を活用する際に、サーバーとの接続不具合が多発し、予定の問題数を消化できない生徒が大勢いた。	・『ぎゅっとe』を活用する際に、サーバーとの接続不具合が多発し、予定の問題数を消化できない生徒が大勢いた。	・『ぎゅっとe』を活用する際に、サーバーとの接続不具合が多発し、予定の問題数を消化できない生徒が大勢いた。
気づき		・聴解訓練で活用した『ぎゅっとe』は自学教材として有用であるが、生徒の集中力は30分を過ぎると激減するようである。	・教室外で目標言語を使用することは学習の良い動機付けになるようである。 ・また創作活動は学習環境をより活性化させる。	・生徒予想以上にレシテーションに興味関心を示し、積極的に取り組んだ。 ・サーバー環境の改善が早急に求められる。



B . Acceleration期の指導に因るパフォーマンスの変化

Acceleration期の指導に係わる、パフォーマンスの変化を以下の表5 - 2 - 1 - 2に指摘し、評価する。

表5 - 2 - 1 - 2

Acceleration期の指導に因るパフォーマンスの変化に基づく結果、考察と評価および次年度への課題

	結果	考察と評価	次年度への課題
	「総合指数」はスピーキングのみで向上した。	第2フェーズで劇的に向上した。モノログ活動と、トーキング・マッチなどの議論活動を関連づけて指導した成果と考えられる。	必要ならば、指導内容の改善。
	「流暢さ」はライティング、スピーキングとも向上した	ライティング、スピーキングとも第2フェーズでの向上が大きかった。ライティングは5分間ライティングを継続したこと、スピーキングは、モノログ活動と、トーキング・マッチなどの議論活動を関連づけて指導した成果と考えられる。	指導内容の充実を図るとともに、指導内容を記録、整理してテキストを作成するなどして、今後の発展に繋がるよう留意する。
	「流暢さ」はライティングにおいては、第1フェーズでの向上はみられなかった。	第1フェーズでは、ライティングのイベント型活動で、レポート、スピーチ、プレゼンテーションなど、「速さ」よりも「内容の確かさ」が求められる活動が中心であったためと考えられる。	適度な「流暢さ」を維持できるように留意して指導する。
	「正確さ」はスピーキングにおいて、第1フェーズでは下降し、第2フェーズでは向上した。	「流暢さ」を優先すると「正確さ」が下がるなど、「量」と「質」がトレードオフの関係にある。しかし、第2フェーズでは、練習効果、あるいは受験勉強の成果など、あらゆる活動を通じて挽回を図っているようである。	簡単ではないが、実践に役立つ基礎力として、「正確さ」を高める指導を考える。
	「適切さ」はスピーキングのみ向上した。	トレーニング型の活動では、それまでは「話す」ために「書く」ことを行っていたが、これを逆に、「話してから書く」という活動に切り替えたからかもしれない。	内容の伴わない「創造」や「思考」はあり得ないので、「書く」ことにも対応できる、内容力への留意をした指導と評価をする。
	「適切さ」はライティングにおいては、第1フェーズでの向上はみられたが、第2フェーズでは下降した。	第2フェーズでは「議論」するために徹底して「流暢さ」を意識させた弊害と考えられる。	生徒に負荷がかかりすぎない範囲で、「適切さ」にも留意した指導と評価を心がける。
	「適切さ」はスピーキングにおいては、第1フェーズでの向上はみられたが、第2フェーズでの向上はみられなかった。	上記と同様に第2フェーズでは「議論」するために徹底して「流暢さ」を意識させた弊害と考えられる。	生徒に負荷がかかりすぎない範囲で、「適切さ」にも留意した指導と評価を心がける。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	西 巖弘	横山 直子
------	------	-------

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 『コミュニケーション』
--------	----------------	------------------

【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 75 wpm
イベント型	ライティング、ライティング・ディスカッション、トーキング・マッチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション		

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	67 wpm	70 wpm	93 wpm
トレーニング型	活動内容	1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)	1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)	1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)
	工夫点・反省点	・ と で話題を変えて、知識・思考の異なる負荷を経験させた点。 ・ライティングの継続を意識した点。	・イベント型の活動に必要な時間を優先させたので、トレーニングの一部または全部を実施できない場合が半分程度あった。	・CT対策、二次対策などの入試対策が優先されるため、生徒のモチベーションが維持し難い。
イベント型	活動内容	簡易ディベート ペアまたはグループでのディスカッション パブリックスピーチ トーキングマッチ	トーキング・マッチ ディベート ディスカッション	ライティング トーキング・マッチ
	工夫点・反省点	・ワークシートを評価の対象とし、授業参加の程度を自己記録で確認できた点。 ・トーキングマッチの練習法。	・トーキングマッチについては、モノログを発展させた形式に変更し、以前より生徒の発話量が増えた点。 ・ディベートの時間を機械呈示にしてロスタイムがなくなった点。	・リスニング、ライティングなど実践的コミュニケーション能力に関連する入試問題を通じて、リアリティーを高めた点。
気づき		・ワードカウンターやテーブルコーダーを駆使して、スピーキングのピア・リヴィジョンをしてみてもよいかも。	・「加速」を実現した一方で、発話内容の向上がみられない。	・結果的には総合的に向上できた。しかし、「目標値を下回る生徒」、「向上がなかった生徒」への対処が今後の課題。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	佐藤将記	横山直子
------	------	------

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 英語理解
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 160 wpm	暗誦 *** wpm	即興 *** wpm
イベント型			

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	182 wpm	185 wpm	186 wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	授業の中で、CDを聴いて、CDに合わせて音読練習を行った。1学期最後の授業で、既習の教材で音読の速度を測った。内容は知っているが、久しぶりに声に出した場合の平均値は149.6wpmで、5分間練習をして再度測定すると、上記のような結果になった。本年度の目標値は達成された。	2学期前半は授業の中で、CDを聴いて、CDに合わせて音読練習を行った。後半は大学入試問題を中心に演習を行った。	大学入試問題を中心に演習を行った。
	工夫点・反省点	週2時間のreadingの授業で音読も十分に行うのは困難であった。生徒が音読をするのに困難な点として挙げた点は、文が長い時うまく区切れない、息継ぎがうまくできない、固有名詞やliteraryのような発音しにくい単語、読み方がわかっても意味が分からない単語は流れを止める、などである。	特に後半は大学入試問題を中心に演習を行ったため、音読を行う時間はとれなかった。大学の受験に向けて、できるだけたくさんの英文を読む時間を確保すること、音読指導とのバランスを取ることは難しい。	大学入試問題を中心に演習を行ったため、音読を行う時間はとれなかった。大学の受験に向けて、できるだけたくさんの英文を読む時間を確保すること、音読指導とのバランスを取ることは難しい。
イベント型	活動内容			
	工夫点・反省点			
気づき	生徒が困難を感じる部分は音声指導を中心とした科目の中で集中的に指導する必要があると思われる。	CDを使っでの学習は家庭でもでき、効果的であった。	受験指導に重点が移り音読指導の時間が不足がちであった。	



SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	為西正和	横山直子
------	------	------

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 総合英語
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 100 wpm	即興 *** wpm
イベント型			

【実践の記録】

学期		1 学期	2 学期	3 学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	95 wpm	102 wpm	108 wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	授業で2回、および放課後を利用して市大のリスニング・プログラムに取り組む。夏休み終了時までにNo.250までは済ませるとい課題を設定し、全員が達成した。 『英語標準問題1000』の問題演習および、月1回程度の自由英作文を行った。	市大のリスニング・プログラムについては、全員No.400までは済ませるとい課題を設定し、全員が達成した。No.800まですべての問題を終了した生徒も2名いた。 『英語標準問題1000』の問題演習および、月1回程度の自由英作文を行った。	大学入試問題を中心に演習を行った。
	工夫点・反省点	市大のリスニング・プログラムについては、授業で一斉に指導し動機付けをすると共に、各自のペースで、休憩時間や放課後などを利用して取り組ませた。当初の目標では、基本例文を暗唱する活動を予定していたが、受験指導の中で、より多くの問題にふれるためには、音読や暗誦を行う時間を十分確保することは難しかった。	市大のリスニング・プログラムについては各自のペースで、休憩時間、放課後などを利用して取り組ませた。当初の目標では、基本例文を暗唱する活動を予定していたが、受験指導の中で、より多くの問題にふれるためには、音読や暗誦を行う時間を十分確保することは難しかった。	大学入試問題を中心に演習を行ったが、より多くの問題に取り組むためには、音読や暗誦を行う時間を十分確保することは難しかった。
イベント型	活動内容			
	工夫点・反省点			
気づき		授業でリスニングを実施する場合、20名が一斉にアクセスすると、うまく接続されなかったり、途中で速度が異常に遅くなったりと、トラブルが多かった。ハード面での改善が必要である。力のある生徒には問題が簡単なようであるが、一方で、リスニングが苦手な生徒にとっては50分間集中するのは難しい。	市大のリスニング・プログラムについてはほぼ全員が設定した課題まで行うことができた。リスニング向上の一助になっていると思われる。	事後アンケートによると、生徒の85%がリスニングトレーニングは有効であったと回答していた。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	堂鼻康晴	
------	------	--

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 通訳演習
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】 (シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 *** wpm	即興 4 分
イベント型			

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	4 分	5 分	6 分
トレーニング型	活動内容	・聴解能力を高めるために、毎授業時、テキストの音読・復誦・シャドウイング・暗唱活動を行った。 ・即興性を高めるために、単語レベルから文章レベルへの視訳練習を行った。	・聴解能力を高めるために、毎授業時、テキストの音読・復誦・シャドウイング・暗唱活動を行った。 ・即興性を高めるために、単語レベルから文章レベルへのメモ取り練習および要約訓練を行った。	・速聴訓練の集大成として長文を主体として大学入試の聴解問題に取り組んだ。
	工夫点・反省点	・即興性を高めるために、CALL付属のソフト『Eltas Pro-Quick Response』を用いた。	・毎授業の最初に生徒各自の選択したテーマに基づいて2分間の英語スピーチを実施し、その後スピーチの内容に関してディスカッションを行った。	・問題はディクテーションから自由英作文に至るまで、多種多様な形式を提示した。
イベント型	活動内容			
	工夫点・反省点			
気づき		・受講生徒は非常に積極的であり、1学期にして当初のスピーチ持続目標である4分を達成した。	・メモ取り練習や要約訓練は即興トレーニングに有効であるが、メモ取りという手段の習得に傾注し過ぎると本末転倒である。	・長文聴解問題を提示したが、受講生徒はほとんど動じることなく9割以上の正答率であった。1年間の授業成果の表れと言えよう。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	住田	クレイグ
------	----	------

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 英語表現
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 *** wpm	暗誦 100 wpm	即興 *** wpm
イベント型	エッセイライティング		

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	暗誦	90 wpm	94 wpm	102 wpm
	即興	*** wpm	*** wpm	*** wpm
トレーニング型	活動内容	・生徒が設定したテーマに基づく議論 ・recitation	・生徒が設定したテーマに基づく議論、及び生徒自身が選んだ話題を生徒自身がリーダーとなって議論する ・recitation	・生徒が設定したテーマに基づく議論、及び生徒自身が選んだ話題を生徒自身がリーダーとなって議論する ・recitation
	工夫点・反省点	第3学年の生徒の成熟度に感心する	毎時間様々な議論ができ、充実している	毎時間様々な議論ができ、充実した時間となったが、ライティングにまで高められなかった。活動内容が重複しないように他科目との調整が必要である。
イベント型	活動内容	エッセイライティング(500語程度)	エッセイライティング(800語程度)	エッセイライティング(2000語程度)
	工夫点・反省点	peer revision を通してエッセイの理解度を上げるようにした	peer revision を通してエッセイの理解度を上げるようにした	peer revision を通してエッセイの理解度を上げるようにした
気づき		モチベーションも高く、意欲的に課題に取り組んでいる	内容のある議論ができた	来年は新聞記事をもっと活用したい。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭	為西 正和	
------	-------	--

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 時事英語
--------	----------------	-----------

【活動と目標値】（シラバスに掲載のもの）

トレーニング型	音読 140 wpm	暗誦 *** wpm	即興 25 wpm
イベント型	プレゼンテーションやディスカッションの仕方を身につけ、積極的に自己表現する。		

【実践の記録】

学期		1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読	146 wpm	170 wpm	175 wpm
	暗誦	*** wpm	*** wpm	*** wpm
	即興	17 wpm	21 wpm	23 wpm
トレーニング型	活動内容	英字新聞、テキストを使っての音読(数値は各レッスン初回の平均値) e-ラーニングを使った音読、リスニング練習	英字新聞、テキストを使っての音読(数値は各レッスン初回の平均値) e-ラーニングを使った音読、リスニング、読解練習	テキストを使っての音読(数値は各レッスン初回の平均値) e-ラーニングを使った音読、リスニング、読解練習
	工夫点・反省点	・即興ライティングはトレーニングが不十分であった。2学期以降は定期的に授業の中に取り入れたい	・ライティングのトレーニングが十分できなかった	・e-ラーニングを使ってのトレーニングは効果的であった。今後は体験版ではないものが使えればと思う
イベント型	活動内容	各レッスンの内容についてのディスカッション。(5分程度)	プレゼンテーション(10分~15分) 各レッスンの内容についてのディスカッション(5分程度)	プレゼンテーション(10分~15分) 各レッスンの内容についてのディスカッション(5分程度)
	工夫点・反省点	・プレゼンテーションがを行うことができず、9月の初旬に実施することになった	・プレゼンテーションの準備のための時間が十分とれなかった	・オーディエンスと問答しながらプレゼンをする生徒もいた。少人数なので、全員が必然的に参加するようになる
気づき		・音読はほぼ同じ語彙レベルの文章をさせなければならぬ	・多様なトレーニング方法の中から適切な方法を抽出しなければならぬ	・ライティングに費やす時間が少なく、向上があまり見られなかった

### (3) 指導評価シラバスの開発

#### 〔1〕目標値の達成度

「SELHi特別活動の記録」(ステップアップ・レポート)において、とりわけS.U.P.で対象としている発信型のスキルにおける目標値の達成度について検討し、達成度と学期ごとの改善点・工夫すべき点を指摘した。ステップアップ・レポートには、授業担当者ごとの責任において、評価規準(目標値)と指導のプロセスおよび生徒の自己評価との対比や気づきなどを記録して頂いた。

したがって、科目ごとの評価規準の達成度については、ステップアップ・レポートを参考にされたい。

また、学年ごとの目標到達度の目安として、即興モノログにおける「流暢さ」の到達度を検討する。

学年ごとの目標値は卒業までに身につけさせたい能力を設定した上で、そこから逆算して、恣意的に決定したものであり、もともと明確な根拠に基づくものではない。しかし、科目ごとの評価規準(目標値)を設定する上で、最も重要な前提となるので、慎重に決定されなくてはならない。

とくに今年度の取り組みでわかったのは、Acceleration期には、S.U.P.が意図したとおりにFormation期、Creation期には見られなかったほどの伸びが示されており、この点を考慮すれば、1年生、2年生における目標値はもう少し下げる必要がある。

一方で、この学年ごとの目標値を達成した生徒は、1年生で4人、2年生で6人と、少ない割合であるが確実に存在し、このような生徒の能力を限りなく伸長させるためには、安易に低い目標を設定したり、目標を達成してしまったからと言って、その後の指導内容が手薄になるようなことがあってはならない。

表5 - 3 - 1 - 1 即興モノログ(WSAテスト)における「流暢さ」の平均値

	達成値 (WPM)	目標値 (WPM)	達成した 生徒数	在籍の 生徒数
1年	42.7	60	4	40
2年	59.7	70	6	36
3年	93.2	75	36	41

#### 〔2〕目標の達成度から考慮すべきシラバスの改善点

上記(3)の(1)より、評価規準(目標値)に関しては、いったん設定した目標はなかなか変えがたい点がある。むしろ、担当者がシラバスを作成する中で、最も改善が必要と思われた点は以下の2点であった。

教材として取り扱う「題材」「素材」「テーマ」の選定  
各教材の配置順序とその進度

いずれも、今年度シラバス改訂に際して、授業担当者ごとにこれらの配慮をもとに細かな改訂を行っている。少なくとも、授業科目間の有機的な繋がりを意図して、体系化を図り、評価規準を吟味した上ではじめて、内容、順序、進度という細かな点に「目を配る」ということが可能となり始めたところである。

そして、この「目を配る」ということの結実は、添付する「授業科目シラバス(資料2)」と「平成17年度SELHi研究成果中間報告会研究授業指導案(資料3)」に反映されているので参照されたい。